紀行文・随筆

# 姫島紀行と姫島灯台・水の子灯台

西木　直
（会員　佐伯市常盤東町）

平成十八年四月十一日午前七時、マイクロバスにて佐伯駅前出発。

わたし達は常盤の都堂書店から乗車させてもらい、雨降りのなかの出発となった。テレビの天気予報も、わたし自身お得意（の心算）の予報でも低気圧の位置から判断すれば、きょうは一日雨。途中で取り止めとなるにしても、お仲間ご一同様と共にバス旅行なら「それも好し」と、思えば気楽なもの（幹事役の先生方の気苦労を思えば誠に申し訳ないことながら）と、決め込んだ。

途中、別府扇山付近も霧の中、不安な気持ちでファ～ンとした気分でスピードを落としての道行きであった。

空港でのトイレタイムも、未だ時間があると思ってのんびりしていたら、「オレが最後の一人」になっていた。

カスイ・ペテロ岐部の記念教会を、左に見ながら、やがて伊美港へと到着の頃は、これなら何とか行けそうだと思える天候になっていた。

伊美港から姫島港までの、約三〇分間の渡海中に弁当を済ませ、いよいよ上陸である。姫島側では、会から依頼してあったガイドさんが、待っていてくれた。姫島は、東西に細長く歴史と伝統の島、現今は漁業と観光の島として、栄えている島とお見受けした。

順路は、ガイドさんの案内で姫島七不思議を中心に、港～金の逆柳～かねつけ石～拍子水～比売語曾社～稲積の浮田～阿弥陀牡蠣～姫島灯台～大海の地層褶曲～姫島旧庄屋古庄家跡～と、巡回を重ねた。

**＊金の逆柳**　お姫様が使った楊枝を、地面に突き刺したままにしておいたら、それから芽を吹いて成長したので、葉が上を向いている。姫島村史には円葉柳であろうと、現在のものは七代目。比売語曾（ひめこそ）の神が植えたとする説と、真野の長者の娘とする二説ありと云う。

**＊かねつけ石**　お姫様が、この石の前で歯を染めた時、筆と猪口を置いたところ歴然の石の上に痕がついたという。現在この石の表に丸い窪みがあるが、これは伝説の窪みではなく、昭和三五・六年頃同地に囲いを造った時、昼休みに石工がふざけて掘ったため、役場から大目玉をくったという、曰くつきのものだそうである。

**＊拍子水**　お姫様が、化粧の水がないのでパチパチと手を叩いて拍子をとったら、水が湧き出したそうだ。湧き出した時は白い泡だが、泉の底の石や岩は赤く染まっているので「赤水」の名があるそうだ。

**＊比売語曾社**（ひめこそ）　朝鮮南部の意思加羅国の皇子、都怒我阿羅斯等（つながあらしと）が牛の代償に貰った白い石が、美しい女になったが逃げてしまったので、日本国まで追いかけてきたが、女は豊後の国で比売語曾の神になったのだそうだ。これには、その外にいろいろな説があるそうだ。

**＊稲積の浮田**　ここに、夫婦の大蛇が棲んでいた。土地の人が妻の大蛇を殺して埋めてしまった。そこで、そこの田圃が蛇霊のせいで浮いたように動いたので、七不思議の一つになったそうだ。妻を失った男大蛇は、平群島に棲んでいるそうだ。それでは、男大蛇はさぞかし寂しいだろうし、男寡には蛆がわくと言われているから、汚れ放題に汚れていることだろう。

**＊稲積の阿弥陀牡蠣**（かき）　姫島灯台の絶壁の下端に、牡蠣の集団が付いている。その形が阿弥陀像に似ていることと、かねて海水のかからない処にも付いていることから、七不思議の一つとされている。これを食べると、腹が痛くなるといわれており、誰も食べるものはいない。ここは、傍に行けない場所だから、バスの中から遠望しただけだった。

**＊大海の地層褶曲**　一名、引曳褶曲ともいう。大海の海岸近くの絶壁の地上七・八メートルのところに、厚さ四〇センチ弱の地層が唐草瓦のような模様が浮き彫りになっている。二つの堅い層に挟まれた軟弱な層が、地震か地殻の変動で側圧が加えられ、引き褶られたような模様が出来たのだそうだ。

**＊旧庄屋古庄家跡**　姫島村史によれば、庄屋古庄家は十代続いており、最後のお方は幕末から明治にかけて、天才的な外交手腕を発揮し、大きな業績を残されたことが述べられている。馬関戦争の折、井上馨や伊藤俊輔等が

イギリスから急遽帰国し、この地に上陸したときも、それなりの働きがあったであろう。

**＊観音崎の千人堂**　島の北西端に、黒曜石の断崖が四〇メートルの高さに屹立しており、ここに小さなお堂があって馬頭観音が安置されてあることから、観音崎と呼ばれるようになった。この六・六平方メートルほどの小さなお堂に、大晦日の夜債鬼に追われた、千人の善人を収容できると云うので、千人堂と云うそうだ。

しかし、この日は雨降りの後で、急坂悪路のため取り止めることになった。

**＊北浦の浮洲**　北浦の沖合に広い洲があり、満潮の時は海上に浮いているように見えることから「浮洲」と呼ばれているそうだ。ここに高さ二メートル、たたみ四枚分程の大きさの巌があり、これに注連縄を張り、前に鳥居があって神社の扱いで「高部様」と呼ぶそうだ。ここが春の満潮のときでも海水につかることがないので、七不思議の一つに数えられているそうだ。

**＊黒曜石**は村の天然記念物に指定されており、持ち出し厳禁の筈であるが、ガイドさんの曰く「浜に転がっている石ころを拾っただけ、黒曜石は拾っていません。」ガイ

（拍子水）

（金の逆柳）

（観音崎）

（旧庄屋古庄屋）

ドさんは頭がいい。「それはただの石、こちらが黒曜石」とチャンと選別までしてくれた。ガイドさんは地元商社の社員で素人さんと聞いていたし、地語「姫島弁」しか語れないとのことであったが、どうしてどうして、すらりとした長身の美人である。その「地語」が紋きり型の標準語より何倍も親近感があり、心の故郷を感じさせる名ガイド振りであった。

こうして姫島日帰りの研修旅行も、いよいよ終わりに近づき、各自それぞれに土産ものなど物色しながら、船着場へと向かったのであった。

（この記事は昭和六一年発行の姫島村史を参考にしました。誤りあればわたしの責任です）

さて、わたしは、ここまでに姫島灯台に触れずにきた。それは、わたしが四〇年に亘る灯台暮らしのうち、姫島灯台は最後の六年間（平成元年四月～同七年三月）と、水の子灯台は合計十一年九ヶ月（昭和三〇年九月～同三九年六月および平成五年四月～同七年三月）を両灯台の管理に当たったため、これを機会にこのページをお借りして、灯台のことを少しばかり述べることをお許し願いたいと思ったからである。

## 件名：姫島灯台・水の子灯台

そもそも灯台とは、海上の船舶が航海の指標として用いるものを、航路標識と云うと定義されている。灯台が則ち航路標識なのである。海上保安庁が編んだ「日本灯台史」によれば、古くは承和六年（西暦八三九）遣唐使船の安全帰着を願って、西国各地に夜間、炬火を絶えざらしめたのも広義では航路標識としている。

降って後世では、藩主や豪商によって北前船の航路筋などに、設置された灯明台がある。このうち、はっきりと記録の残っているものとして、最古のものは「小倉藩主細川忠興が、慶長十年（西暦一六〇五）豊後の国・東国東郡姫島最南端に石積のかがり火灯明台を設け、家臣奥田源八郎を灯明台奉行に任じた」であるとしている。これが、わが国の本来の意味での烽火灯明台の初めである。わたしは、残念ながら現場を確認していないが、姫島西南端と云えば、達磨山のあたりであろう。このようにわが姫島は、わが国の航路標識の先進地であったのである。

次に、わが国の近代様式灯台は、幕府が米・英・仏・

蘭・露の五ヶ国と結んだ修好通商条約と、下関事件（馬関戦争）に関連して結んだ通商・改税条約によって、明治元年に建設された神奈川県の観音崎灯台が第一号である。以後、日本の開国に伴い国運の発展と、船舶の往来が増加するにつれて、灯台も次々に設置されていった。

さて、いよいよ本題の姫島灯台である。

姫島は伊予灘と周防灘の中間地点に在って、瀬戸内海から外洋に向かう重要航路の分岐点を示しており、北側は姫島沖から周防灘を経て関門海峡をとおり響灘へ通じる。一方南側は瀬戸内海から姫島を右に見ながら、やがて速吸の瀬戸を通って豊後水道・水の子島を経て日向灘へとむかう。

明治三〇年代に入ると、日本はこの時期露国との間が険悪となり、風雲急を告げていた。このため軍からの強力な要請を受けて、姫島と豊後水道の真ん中にある水の子島に灯台を設置することとなった。そして明治三七年三月二〇日、姫島と水の子島の灯台が同時に点灯を開始したのである。

時に、戦争遂行に莫大な戦費を要したことから、灯台の予算はかなり窮屈となり、灯火優先を余儀なくされ、周辺施設の整備は後回しにされ、囲障などの整備は明治四四年まで伸ばされた。

ここで特筆すべきことは、この二つの灯台の灯器具のことである。そもそも灯台は光を遠くまで届かせる必要性と、その灯台が何処の灯台であるかを解らせる必要がある。この二つの用件を満たすため、一国の政府機関が本気で取り組むようになった明治初年以来、数十年の間さまざまな努力が注がれてきた。光力の増大と灯質（明・暗の周期や閃光の回数による区別）の維持、更には安定性である。

光力については、今日のような電力の発達していなかった時代は、いわゆるランプの光であった。そのランプの燃料も菜種油・落花生油・胡麻油・パラフィン油などを使った時代から、石油を使うようになったのは明治一六年頃からであった。要するにろうそくの大型化、または本数を増やすくらいの光をレンズで拡大しているのみであった。

そこに、姫島ではフランス製のソーターハーレー式石油蒸発白熱灯を、水の子島ではバービエー式石油蒸発白熱灯が、日本で初めて設置された。

石油蒸発白熱灯とは、石油（今日で云う灯油）を極小の噴出孔の付いた管に石油を入れて高温で焼くと、噴出孔から高温のガスとなって噴出する。これをマントルと呼ばれる釣鐘状の部品に、下から吹き付けて燃焼させると強烈な白色光を発する。当時としては、目を見張るばかりの驚異的な光力の増大であった。

しかし、この時代も、最新方式の機器であることと、安定作動とは相容れない状態であったらしく、不具合箇所が多く、時には管の一部が破裂を起こし、復旧のため四苦八苦の状態であったことが、経歴簿に綿々とつづられている。水の子島も、ほとんど同様の状態であったが、メーカーの違いもあったのか、こちらはいくらか調子がよかったように見受けられる。

何れにしても、機器の技術面も勤務地も、僻遠の最先端の初代灯台長の御苦労がしのばれることである。

大正一〇年七月には、姫島にも電気会社が設立され、営業を開始しているが、姫島は東西に長い島である。最東端の岬にある灯台に、商用電力が導入されるのは、戦後もズーットあと、昭和三八年であった。

太平洋戦争では、灯台も攻撃を受けることは免れなかった。と云うより、米軍は機動艦隊を日向灘沖に置き、北九州の八幡の工場群を攻撃するには、豊後水道・周防灘は格好の通路であったであろう。だとすれば、往き帰りの格好のお土産目標でもあったであろう。

姫島の場合　第一次　昭和二〇年七月一四日
　　第二次　　同　　七月二四日
　　第三次　　同　　七月二八日
　　第四次　　同　　七月二八日
　　午前八時頃
　　午後一時三〇分頃

四回の攻撃で合計三〇機あまりによる機銃掃射を受けている。

当時の灯台長は、味方の高射砲弾の破片により負傷しながらも、地元警防団などの応援を得て、機械や燃料の避難に奮闘の模様がつづられていた。こうして、第二次攻撃のあと、灯台は点灯不能となった。

水の子灯台もほぼ同様の攻撃を受け、機械類も破壊さ

れ職員も引き揚げたので、当分の間無人島となった。

昭和二三年一〇月　三年三ヶ月ぶりに本灯が復旧した。それまでの間は小さなランプを灯し続けた。

昭和三八年九月二八日　商用電力が導入され、同時に各種の機器類も換装されて、光力も一〇万カンデラ（燭光）に大幅アップとなった。

昭和四五年四月　予備電源装置や遠隔監視装置も導入され、完全自動化となり無人灯台となって、今日に到っている。

ところで、平成一六年のある日、ぼんやりと食事をしながらテレビを見ていたとき、アッアーアーと叫んで一瞬凍りついてしまった。米軍機が、水の子灯台を攻撃している。曳光弾が、灯台の頭部・灯籠を目がけて吸い込まれていく。攻撃機の機首に据え付けられたカメラが鮮やかに捉えていたのだ。わが愛する水の子灯台が、無惨に打ち砕かれている。少し大げさに言えば、わが胸を刺される思いであった。

後に、ＮＨＫ大分に行き、その時のビデオテープのコピーを戴きたいと申し入れたが、ほんの数秒のことであるため分からずじまいになっていた。ところが一昨年、水の子灯台のことで鶴見町にお伺いすることがあった時、その席で神田亀吉氏が、そっくりそのまま録画されていることを知り、コピーを頂いた。

（姫島灯台　集合写真）